

「秦夢記」考

宮野直也

はじめに

中唐の士大夫沈亞之（七八二？～八三二？^①）、字は下賢、の著作中には三篇の伝奇小説が現存している。それらについて、『沈下賢文集』の『四庫提要』には、

其中如「秦夢記」、「異夢錄」、「湘中怨解」、大抵諱其本事、託之寓言。

との指摘がある。就中「秦夢記」は、甚だ類型的なプロットに^②、唐代伝奇小説としては異例の多量の典故を鏤めているという点で、大いに解釈を喚起する。

本稿は、まず「秦夢記」の文辞に密着して、換言すれば内容よりも表現に焦点を当てて検討を加え、次いで共通のプロットを持つ他の伝奇小説と比較することによって、この小説の構造上の特徴を明らかにし、以てその寓意の所在を探ろうとするものである。

一

論証の必要により、以下に「秦夢記」の全文を、四部叢刊本『沈下賢文集』卷四に基づいて録出する。⁽³⁾

I 太和初、沈 垂之將之邪、出長安城、客橐泉邸舍。春時、昼夢入秦。⁽¹⁾

II 主内史廖 拳 垂之。秦 公召至殿、膝前席曰、「寡人欲強國、願知其方。先生何以教寡人。」垂之以昆彭齊桓對。公悅、遂試補中涓（秦官也）、使佐西乞伐河西（晋 秦郊也）。垂之帥將卒前攻、下五城。還報、公大悅、起勞曰、

「大夫良苦、休矣。」

III 居久之。公幼女弄玉媚簫史先死。公謂垂之曰、「微大夫、晋五城非寡人有。甚德大夫。寡人有愛女、而欲与大夫備洒掃、可乎。」垂之少自立、雅不欲遇幸臣蓄之。固辭、不得請。拜左庶長、尚公主、賜金二百斤。民間猶謂

簫家公主。

IV 其日、有黄衣中貴騎疾馬來、迎垂之入、宮闕甚嚴。呼公主出、鬢髮、著偏袖衣、装不多飾。其芳姝明媚、筆不可模樣。侍女祗承、分立左右者数百人。召見垂之便館、居之。

V 垂之於宮、題其門曰、「翠微宮」、宮人呼沈 郎院。雖備位下大夫、由公主故、出入禁衛。公主喜鳳 簫、每吹簫、必下翠微宮高楼上、声調遠逸、能悲人、聞者莫不自廢。公主七月七日生、垂之嘗無脫寿。⁽¹²⁾内史廖曾為秦以女渠遭西戎、戎主与廖水犀兩合。垂之從廖得以獻公主。公主悅受嘗結裙帶之上。穆 公遇垂之礼兼同列、恩賜相望於道。

VI 復一年春、秦 公之始平、公主忽無疾卒。公追傷不已。將葬咸陽原、公命垂之作挽歌。応教而作曰、「泣葬一枝⁽¹⁵⁾

紅、生同死不同。金鈿墜芳草、香繡滿春風。旧日聞簫處、高楼当月中。梨花寒食夜、深閉翠微宮。」進公。公誦詞、善之。時宮中有出声若不忍者、公隨泣下。又使垂之作墓誌銘。独憶其銘、曰、「白楊風哭兮、石磬髣紗。雜英滿地兮、春色煙和。珠愁粉瘦兮、不生綺羅。深深埋玉兮、其恨如何。」垂之亦送葬咸陽原、宮中十四人殉之。¹⁰ VII 垂之以悼悵過戚被病、臥在翠微宮。然處殿外特室、不入宮中矣。居月余、病良已。公謂垂之曰、「本以小女將託久要、不謂不得周奉君子而先物故。弊秦區區小国、不足辱大夫。然寡人每見子、即不能不悲悼。大夫盍適大國乎。」垂之對曰、「臣無狀、肺腑公室、待罪右庶長、不能從死公主。君免罪戾、使得歸骨父母國、臣不忘君恩、如今日。」

VIII 將去、公追酒高会、¹¹ 声秦声、舞秦舞。舞者擊鼙拊鞀鳴鳴、而音有不快、声甚怨。公執酒垂之前曰、「寿。顧此声少善。願沈郎廣揚歌以塞別。」公命趣進筆硯。垂之受命、立為歌、辭曰、「擊体舞。恨滿煙光無處所。淚如雨。欲擬著辭不成語。¹² 金鳳銜紅旧繡衣、幾度宮中同看舞。人間春日正歡樂、日暮東歸何處去。」歌卒、授舞者、雜其声而道之、四座皆泣。既、再拜辭去。

IX 公復命至翠微宮、与公主侍人別。重入殿內時、見珠翠遺碎青階下、窓紗檀点依然。宮人泣對垂之。垂之感咽良久、因題宮門、詩曰、「君王多感放東歸、從此秦宮不復期。春景自傷秦喪主、落花如雨淚燕脂。」竟別去。

X 公命車駕送出函谷関。已、送吏曰、「公命尽此。且去。」垂之与別、語未卒、忽驚覺、臥邸舍。

XI 明日、垂之与友人崔九万具道。九万、博陵人、諳古。¹³ 謂余曰、「『皇覽』云、『秦穆公葬雍橐泉祈年宮下。』非其神靈憑乎。」垂之更求得秦時地誌、説如九万云。¹⁴ 嗚呼、弄玉既仙矣、惡又死乎。

梗概は以下の通りである。

太和の初年（八二七）沈亜之は橐泉に宿り、夢の中で春秋時代の秦国へ行き（Ⅰ）、穆公に認められ戦功を立て（Ⅱ）、公主弄玉の婿となつて栄えたが（Ⅲ～Ⅴ）、突然公主が死に、亜之は葬儀の際に挽歌、墓誌銘を作り（Ⅵ）、秦公は悲しみの余り亜之に暇を出し（Ⅶ）、亜之は別れを惜しんで詩歌を作り（Ⅷ～Ⅸ）、函谷関を出たところで目覚めると（Ⅹ）、亜之の宿っていたのは秦の穆公の墓の所在地であつた（Ⅺ）。

一読して明らかのように、夢の中で立身出世してまた現実に戻るといふプロットは、はるかに著名な沈既済「沈中記」及び李公佐「南柯太守伝」と共通である。成立時期は「秦夢記」が最も後と考えられる⁽⁵⁾。

二

前述の如く「秦夢記」のストーリーは多量の典拠に基づいて構成されている。

秦の穆公が歴史上の人物であることは言うまでもなく、西乞について（Ⅱ⑤）は、晋と戦つて敗北したことが『左伝』僖公三十二年から三十三年と『史記』秦本紀の穆公三十二年から三十三年に見え、内史廖が西戎に女樂を送つたこと（Ⅴ⑬）は『史記』秦本紀の穆公三十四年に記されており、一方公主弄玉について（Ⅲ⑦・Ⅴ⑫）は『列仙伝』に記載がある、ということは已に内山氏によつて指摘されている⁽⁶⁾。更に秦が穆公時代に晋と戦つて、一時的にせよ河西の地を得たこと（Ⅱ⑥）は、『史記』秦本紀の穆公十五年及び『左伝』僖公十五年に見える。

ということは、夢の中での立身出世といふプロットをストーリーへと具体化する際の素材は、『左伝』、『史記』及び『列仙伝』という文献に密接に依拠しているのである。「秦夢記」におけるこのような著作態度は、『枕中記』において主人公が夢の中の立身出世の過程で遭遇し関与する事件や人物の多くが玄宗期の史実に基づいていること⁽⁷⁾、

と甚だ類似しているように見える。

さて、「秦夢記」のストーリーの細部が典拠に基づいている事例は、管見に入っただけでも更に以下の如きものがある。

沈亜之の送別の宴での

声秦声、舞秦舞、舞者擊髀拊髀鳴鳴、而音有不快（Ⅷ⑬）

という記述は、李斯の「諫逐客書」の

夫擊甕叩缶、彈箏搏髀、而歌呼鳴鳴快耳者、真秦声也。（『史記』李斯列伝）

に基づく。

弄玉の葬儀に「宮中十四人殉之」（Ⅶ⑭）とあるが、秦は武公二十年に初めて六十六人を従死させて以来殉死の風があり、殊に穆公は所謂三良を含む百七十七人を殉死させて『詩経』黄鳥の題材にまでなり、殉死と強く結び付いている⁽⁹⁾。

亜之が左庶長に拝されたこと（Ⅲ⑧）については、左庶長は、穆公より後の孝公の時代に商鞅が制定した秦爵二十等の第十であるから、時代錯誤ではある。因みに商鞅は左庶長に任じられて変法の令を定め、大きな功績をあげた。また商鞅が孝公に遊説して気に入られた時には「公与謂、不自知鄴之前於席也」であった⁽¹⁰⁾。従って亜之を召見した時、秦公は「膝前席」（Ⅱ②）であったという記述も、Ⅲ⑧と照応して『史記』商君列伝に基づく可能性がある。だとすれば更に、穆公の「先生何以教寡人」（Ⅱ③）という言葉も、秦の昭王が范雎に会った時の「先生何以幸教寡人」（『史記』范雎列伝）に基づいたのかもしれない。以上はいずれも時代錯誤ではあるが、「秦夢記」を秦に関する典故と密接に結びつけようとする作者の意図が窺える。

巫之が秦公から強国の方を問われて「昆彭斉桓」を以て答えたこと(Ⅱ④)については、まず「昆彭」が昆吾と大彭である以上、下の二文字も二人を表すのが通常の語法である。そして、恐らく「昆彭斉桓」の典拠である梁の武帝の令に「望昆彭以長想、欽桓文而歎息」(『梁書』武帝紀中興二年)とあるように、斉の桓公は晋の文公と並挙されるのが通例である。ところが周知の如く晋の文公は秦の穆公の援助によって即位することができたのであるから、穆公に対して説く場合には範例として使えない。⁽¹⁾「昆彭斉桓」のようなぎこちない表現となった所以である。この事例は、作者が明白な時代錯誤を犯さないように神経を使っていたことを示している。

以上「秦夢記」のストーリーの細部が多くの典拠に基づいていることを示した。ところが「秦夢記」のストーリーには、主要な典拠の一つ『列仙伝』と大きく異なっている点がある。言うまでもなく公主弄玉の死(Ⅵ⑮)である。『列仙伝』によれば、弄玉は夫の簫史とともに仙去したのであるから、死ぬはずはない。作者自身この矛盾を明白に意識していたことは、「嗚呼、弄玉既仙矣。悪又死乎。」(Ⅺ②②)という言葉から確認できる。

更にもう一つ疑問点がある。今まで指摘した典拠は、ストーリーと明白には矛盾しない春秋戦国時代の秦国に関するものであった。ところが「秦夢記」のストーリーの細部には以下の如く明らかに唐代に属する史実や風俗に基づくものが存在する。

巫之が公主弄玉と結婚して住居とした宮殿の名は「翠微宮」(Ⅴ⑩)であるが、これは唐代の實在の離宮の名である。『旧唐書』太宗紀や『元和郡県図志』にも記載があるが、『新唐書』地理志が最も手際良く沿革をまとめている。京兆府長安県の本注に云う、

南五十里太和谷有太和宮。武徳八年置。貞観十年廢。二十一年復置、曰翠微宮。籠山為苑。元和中以為翠微寺。長安県の南五十里の終南山中にあるのだから、穆公、弄玉に縁りの雍とは地理的にも隔たっている。

弄玉との婚礼に「黄衣中貴」(Ⅳ⑨)が迎えに来るが、春秋時代の黄衣は貴人の服である一方、唐代には多数の黄衣の宦官が存在した。⁽¹³⁾

亜之が秦舞を歌った「金鳳銜紅旧繡衣、幾度宮中同看舞」(Ⅷ②⑩)という表現については、王建の「宮詞百首」其十七に、

羅衫葉葉繡重重、金鳳銀鵝各一叢。每遍舞時分兩向、太平万歳字当中

とあり、この詩は唐代の宮廷を中心に盛行した大規模な舞踊である「字舞」を描写したものである。⁽¹⁴⁾ また李賀の「河南府試十二月樂詞」十月に「金鳳刺衣著体寒、長眉对月闌鸞環」とあり、これは宮女を描写したものと考えられている。つまり唐代には金鳳の刺繡をした衣を著けた宮女による舞踊が存在し、しかもそれらは詩の題材となるほどに当時においてはよく知られていたのである。

以上の事例がいずれも宮中に関わるということに留意すべきである。

三

本節においては、共通のプロットを持つ「枕中記」及び「南柯太守伝」と比較することによって、「秦夢記」の特徴と問題点を明らかにする。

第一に「枕中記」と「南柯太守伝」はいずれも末尾において、現実の栄華も夢と同じく空しいものであるという寓意を明言している。⁽¹⁵⁾ 一方「秦夢記」には寓意の明言はない。

次に夢の中におけるストーリーを検討する。

「枕中記」においては、主人公は波乱を伴いつつも出世し、一族ともども栄華を極め、それが死によって終り、目覚める。「南柯太守伝」においては、作品が長くなった分だけ多様な要素が含まれてはいるが、中心は主人公の栄華と没落であり、最後は失脚して帰郷した所で目覚める。死も失脚も栄華の喪失という点では同一であるから、この二作品とも栄華の獲得と喪失が描かれている、と纏めることができる。

一方「秦夢記」においては、主人公の妻である公主弄玉、特にその死、に重点が置かれており、主人公の出世や栄華の描写は対照的に甚だ少ないのである。この点を以下やや詳しく論じる。

「枕中記」では主人公の妻は名家の娘ではあるが名前も描かれず、主人公との結婚は主人公の出世の端緒として最初に置かれているだけであり、その死も出て来ない。「南柯太守伝」では主人公は公主との結婚によって栄達し、公主の死後主人公の運命は下り坂になる。とは言え主人公の失脚の原因は、本人が「威福日盛」であったために嫌疑を招いたことである。従って「南柯太守伝」においても、主人公の栄達と没落に重点が在り、公主はそれにきつかけを提供するに過ぎないという点では「枕中記」と変わりがない。

「秦夢記」というと、主人公は戦功を立てたことによって公主と結婚し、公主の死後秦公は「寡人毎見子、即不能不悲悼」(Ⅶ⑩)という理由で主人公に帰郷を命じる。ということは「秦夢記」では、「枕中記」・「南柯太守伝」とは逆に主人公が出世した結果公主と結婚するのであり、また公主の死がそれだけで夢の世界を終わらせるのである。一方で主人公の死や没落といった要素は存在しない。

以上の考察は描写の量の面から見ても支持される。「秦夢記」で主人公の出世と栄華を描いているのはⅡ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴであるが、主人公の功績を描いているのはⅡのみであり、それ以外は、公主弄玉と結婚するいきさつ、婚礼の様子、結婚生活等の描写に充てられている。しかもⅡⅤは夢全体の約四割に過ぎず、続くⅥで弄玉が死ぬと、以下

夢の過半は主人公の弄玉の死への悲しみと、それを原因として秦国に名残を惜しみつつ別れを告げる情景を描いているのである。

更に「秦夢記」には、「枕中記」・「南柯太守伝」には無い、主人公の作った四篇の韻文が挿入されている。それらの中の前半の二篇（いずれもⅥ）は弄玉の挽歌と墓誌の銘であるから、直接弄玉の死を傷んだものである。後半の二篇（Ⅷ・Ⅸ）は秦国を去る際に作られたものであり、その内容は当然のことながら、自身が秦国を去るきっかけとなった弄玉の死を傷んだものである。つまり四篇とも弄玉の死を廻る作品なのである。

以上を要するに、「秦夢記」の夢の中のストーリーの重点は、展開の上からも描写の内容と量から見ても、公主弄玉とその死に在り、主人公の栄達は弄玉に関するエピソードを導き出すための前提に過ぎないと考えられる。

次に夢の前後の現実の部分のストーリーを検討する。

夢の前の主人公の状態は、「枕中記」では強い出世願望を持つ布衣、「南柯太守伝」では失職して落ちぶれ酒びたりの身、であった。いずれにせよ彼等にとつては出世が最重要な関心事なのである。ところが夢の後になると、いづれも出世の空しさを悟る。言うまでもないことであるが、このような主人公の回心は、夢の中での栄華の獲得及び喪失と照応して、寓意にぴたり適合したストーリーを形成している。

更に「枕中記」・「南柯太守伝」にはいずれも前後が照応して夢がごく短時間であったことを示す描写がある。¹⁶これは夢のはかなさを表すから、寓意を強調する効果を有する。

今一つ、現実と夢の往復の描写についても、現実の部分からはみだす事例もあるが、ここで検討する。「枕中記」では、夢の中への移行に、枕の穴の中へ入るといふ短いが印象的な描写を与えている。¹⁷「南柯太守伝」では、夢と現実とを往復する旅の描写に作品全体の十分の一強を費やしている。これらは現実と夢との相関関係を強調する機能

を果す。

以上のような描写は、現実と夢を往復するというプロット自体の持つ、現実と夢とを対比させる能力を活性化している。この対比が寓意に直結することは論を俟たない。

一方「秦夢記」においては、夢の前後の現実の部分は質量ともに貧弱である。

まず量について述べると、「秦夢記」において現実の部分の長さが作品全体に占める割合は約九分の一に過ぎない。「秦夢記」よりわずかに長い「枕中記」で三分の一弱、「枕中記」の約三倍の長さの「南柯太守伝」でも四分の一弱もあるにもかかわらずである。

続いて質つまり内容について検討する。「秦夢記」において夢の前に主人公について述べられているのは、旅行中に橐泉に宿ったこと（I）のみである。従つて夢の後に主人公の回心が生起する余地はもとも存在しない。

ところで、主人公の橐泉滞在は、夢の後における、橐泉は秦の穆公が葬られた土地だ（XI②③）という記述と前後照応していることは注目すべきである。

更に、夢の前後が照応して夢が短時間であつたことを示す描写は存在しないし、夢と現実との往復の描写（I①・X）はきわめて短かく、しかも型通りでそつけない。ということとは、「秦夢記」においてはストーリーがプロットを持つ夢と現実を対比させる能力を阻碍しているのである。

最後に夢の中の世界の設定について検討する。

「枕中記」において夢の中で主人公が活躍するのは玄宗期の政界であり、主人公の事績や背景となる事件、人物の多くは玄宗期の史実に基づいており、⁽¹⁸⁾当然のことながら史実との異同が存在する。⁽¹⁹⁾しかしながら夢の内容の典拠となる史実は、主人公が夢を見た時点として設定された開元七年から見れば近未来のことに属している。⁽²⁰⁾更にこれは

夢である上に、主人公はこの夢を契機として出世を捨てるのだから、この夢見られた未来は決して実現され得ないのである。従って典拠となる史実と夢との異同は問題になり得ない。一方でこのような典拠の使用は、開元七年の住人である主人公にとっても、玄宗期の歴史を已に知っている「枕中記」の読者にとっても、夢の迫真性を強化する役割を果たすはずである。栄華の夢が真に迫っていればいるだけ目覚めた後の空しさは強まるから、以上のような夢の設定は寓意を強調する機能を果たす。

「南柯太守伝」においては、「枕中記」とは対照的に全く架空の存在である槐安国を設定する。しかし夢の後で主人公が、この槐安国が実は蟻の国であったということを確認するのと照応して、夢の栄華の空しさを強調する役割を果たす。従って寓意を強調する設定であるという点では「枕中記」と同様である。

「秦夢記」は以上に述べた「枕中記」・「南柯太守伝」とそれぞれ部分的に類似しているが、それはかえって差異を際立たせる。

まず「秦夢記」と「枕中記」とはいずれも歴史上の現実の世界に夢の中の世界を位置づけている。しかし「秦夢記」においては、「枕中記」と異なり、主人公が夢を見た太和元年からはるか過去の春秋時代の秦國に舞台を設定し、その時代の史実や伝承に、つまりは主人公にとってさえも既定の事実に基づいてストーリーを形成している。従って典拠との異同は当然問題になる。

この点から見ても、第二節で指摘した弄玉の死という典拠に反したストーリー展開は重大な疑問を喚起する。作者自身がこの問題の存在を認めていることも已に指摘した。のみならず、実は「秦夢記」の夢の後の現実の部分全体（Ⅺ）が専ら夢と史実や伝承との対応、換言すれば夢と文献の記載との対応、を問題にしているのである。

そしてこれが「秦夢記」と「南柯太守伝」との類似点である。つまり両者とも夢の後で、夢が現実界の何と対応

しているのかを問題にしているのである。しかしながら、「秦夢記」においてこれがどのような役割を果しているかは、「南柯太守伝」のように一見して明白ではない。

因みに「秦夢記」において夢と典拠との対応を問題にしているのは作品の末尾、つまり「枕中記」・「南柯太守伝」では作品全体の寓意が提示されている場所においてである。その上、先に指摘したように、夢と典拠との対応に関する記述（Ⅰ・Ⅺ）は、「秦夢記」において夢の前と後とが照応している唯一の事例である。これらは甚だ示唆的な事実であると思われる。

四

前節で指摘したように、「秦夢記」のストーリーにおいては公主弄玉とその死に重点がおかれている。そして弄玉の死を題材とした四篇の韻文が主人公Ⅱ作者によって作られている。その中の挽歌の典故を検討すると、甚だ興味深い事実が浮かび上がるのである。

挽歌の前半の

泣葬一枝紅 生同死不同 金鈿墜芳草 香繡滿春風（Ⅵ⑩）

は李白の「清平調詞」其二の

一枝紅豔露凝香 雲雨巫山枉斷腸

及び白居易の「長恨歌」の

六軍不發無奈何 宛轉蛾眉馬前死 花鈿委地無人收 翠翹金雀玉搔頭

という、いずれも甚だ人口に膾炙した詩句に基づいているのは明らかである。前者が楊貴妃の美しさを、後者が楊貴妃の死を描いたものであることは言うまでもない。

弄玉と楊貴妃とは、同じく関中に都した秦と唐において、公主と貴妃という立場の違いはあるが、いずれも君主に連なる高貴な身分の美女であり、同様に突然の死を迎え、各々の夫は永く哀惜する。これだけの類似点があるのだから、この詩の典故表現は一見極めて適切であるように思われる。

しかしながら、まず楊貴妃は弄玉よりはるかに後世の人であるから、秦公をはじめ「秦夢記」の中でのこの詩の読者に対しては、この典故は全く機能し得ない。つまりこの典故は小説「秦夢記」の読者のみを対象として用いられているのである。

更に重大な問題として、弄玉と楊貴妃との類似性を成立させている諸要素の核心である突然の死は、弄玉に関しては、先に指摘したように「秦夢記」全体が密接に典拠に基づいている中でそれだけが典拠に背反した、作者沈亜之の創作なのである。

しかも、前節で指摘したように、「秦夢記」においては、同一のプロットをもつ先行作品「枕中記」・「南柯太守伝」とは異なり、夢の中でのストーリーの重点は弄玉とその死にある。

加えて、第二節で指摘したように、夢の中におけるストーリーの素材として春秋戦国期の秦の典故が多量かつ注意深く使われているにもかかわらず、唐代のしかも宮中に関わる典故が混入している。

その上に、第三節で指摘したように、夢の前後の現実の部分のストーリーは、前後照応して専ら夢と典拠との対応を問題にしているのである。

以上の事実を考え合わせると、「秦夢記」という小説は、弄玉と楊貴妃とを重ね合わせる見立てを中心にして構成

されているのではないだろうか。そして挽歌において弄玉を楊貴妃に擬えるのは単なる典故表現ではなく、「秦夢記」の読者にこの見立てを指示する機能を有しているのではないだろうか。

以下その傍証を挙げる。

まず「秦公之始平」(Ⅵ⑭)という記述についてであるが、秦公はこの小説では傍役であるから、主人公に関係のない動静は描かれる必要はないはずである。ところがこの記述は主人公にもストーリーの進行にも全く関係しないにもかかわらず、全文で千字足らずの短い小説の中に存在している。これは一体どういうことであろうか。

『元和郡県図志』京兆府下に云う、

興平県。本漢平陵県、属右扶風。魏文帝改為始平。……景竜二年、金城公主出降吐蕃、中宗送至此県、改始平
県為金城県。至徳二年改名興平。

つまり始平という地名は春秋時代には存在せず、魏の文帝の時代に始まり、県名としては沈亜之の時代には已に消滅していたのである。ところで、この興平県の項には以下の様な記載がある。

始平原、在県北十二里。東西五十里、南北八里、東入咸陽界、西入武功界。

…

馬嵬故城、在県西北二十三里。馬嵬於此築城、以避難。未詳何代人也。

つまり始平原という地名は沈亜之の時代にも存在し、そこに楊貴妃が死んだ馬嵬があるのである。一方「秦夢記」においては、「秦公之始平」に続いて「公主忽無疾卒」と弄玉の死が述べられる。ということは、「秦公之始平」という記述の存在は、弄玉の死を、唐の君主玄宗が馬嵬に行き、楊貴妃がそこで死んだことと類比させる役割を荷なっているのではないだろうか。⁽²¹⁾

次に翠微宮の宮人が翠微宮のことを「沈郎院」と呼んだこと（V⑪）についてであるが、親類や友人ならまだしも、宮人が宮殿の主人に対して「沈郎」という甚だくだけた呼びかたをしたことは、天宝年間に玄宗皇帝のことを宮人が三郎と呼んだという事実⁽²²⁾を想起させる。

以上の二点も、「秦夢記」が弄玉と楊貴妃とを重ね合わせる見立てを中心にして構成されていると認めれば、ストーリー中での存在意義が理解可能になるであろう。

以上の考察に基づいて、最後に「枕中記」・「南柯太守伝」における寓意及び「秦夢記」における見立てそれぞれの、作品構造との関係を検討する。

まず寓意について述べる。「枕中記」・「南柯太守伝」においては、第三節で見たように、ストーリー・プロット・夢の設定（これは表現とストーリーの双方に関わるが）それぞれが相互に整合しつつ寓意に適合したり、寓意を強調したりしている。このような整合性は、寓意が作品を各水準を通じて規定していることによる。ということは寓意と作品とは上下関係にあるのである。読者から見ればこの上下が入れ替わって、作品を読めばその深奥に寓意を見出すことになる。こずれにせよ作品と寓意とは言わば垂直方向の関係にある。また寓意とは作品に文字通り「寓」されている意義であるから、読者が作品を通じて寓意に到達すれば、作品自体は用済みということになる。

次に見立てについて論じる。本稿における私の考察が正しいとすれば、「秦夢記」は見立てを中心にして構成されている。ところが第三節で確認したように、「秦夢記」においてはストーリー・プロット・表現の各水準の間には不整合が存在する。

それでは見立てはどのようにして形成されているのかというと、本節前半で見たように、ストーリーと典故が相俟つてなのである。具体的に言えば、夢の舞台を春秋時代の秦国に設定し、設定にあわせてストーリーの素材に秦

の典故を多用しながら唐の典故を混入し、典故に反する弄玉の突然の死というストーリーの展開を創作し、しかもそれをストーリーの中心に据え、弄玉の挽歌に楊貴妃の典故を用い、仕上げに夢の前後が照応して夢と典故との対応に読者の注意を促すことによって形成されるのである。

ということはストーリーの展開は、典故が機能する前提条件ではあるが、それだけでは弄玉は楊貴妃と繋がり得ず、典故の巧みな運用によって初めて弄玉と楊貴妃との繋がりが設定されるのである。従って見立ての実現のためには典故の方がより大きな役割を果たしていると考えられる。

典故は、もとより内容と表現の双方に関わるとは言え、文辞が他の書物の文辞と一致することによって機能するのであるから、第一義的には表現の水準の存在である。従って「秦夢記」の見立ては作品の表層構造に主に依存して実現されているのである。一方ストーリーより深層の水準であるプロットに対して、ストーリーは整合せず、それどころかプロット自体のもつ能力を妨げ、プロットを表現・ストーリーの単なる土台にしてしまっている。

もう一つ付け加えることがある。見立ての作用は、寓意とは異なり、一方通行的ではない。「秦夢記」に関して言えば、弄玉から楊貴妃へと到達すれば、それで弄玉の方は用済みというものではない。見立てとは、異なった二つのものを重ね合わせることで、換言すれば相異なる二者の間に設定された等価関係それ自体のことなのである。「秦夢記」においては、見立ては主に典故の利用によって実現されている。ということは、この見立ては、典故によって「秦夢記」と他の書物との間に設定された水平方向の関係の網が織り成した模様の如きものである。

注

- (1) 沈亜之の生涯と作品については、内山知也『沈亜之と『秦夢記』その他について』(『隋唐小説研究』昭和五十二年木耳社刊所収)に詳細な考証がある。本論文はこの内山氏の論文から多大な恩恵を蒙った。記して感謝の意を表する。
- (2) 本論文においては、プロットとストーリーを一对の概念として使用する。E. M. Forster の "Aspects of the Novel" (1925) に云う、「われわれはストーリーを、時間的順序に配列された諸事件の叙述であると定義してきました。プロットもまた諸事件の叙述でありますが、重点は因果関係におかれます。」(米田一夫訳『小説とは何か』ダヴィッド社一九六九年刊 p 一〇八) 補足として、フォースターは明言していないが、"Princeton Encyclopedia of Poetry & Poetics" (Princeton University Press 1974) の PLOT の項に "Clearly an episode in itself does not make a plot; equally clearly the presence of two or more episodes does not make a plot: the concept of plot refers to a relationship — and an implied causality — among episodes." とある如く、プロットは、ストーリーを形成する具体的な諸事件の内奥にある抽象的な水準の存在である。
- (3) 「秦夢記」は『太平広記』巻二八二にも収録されており、『沈下賢文集』とは多少の異同があるが、本稿の論旨には影響しない。なお、以下の「秦夢記」本文では、汪辟疆『唐人小説』を参考にして明白な誤字を正し、異体字は通用の字体に改めた。
- (4) 以下「秦夢記」の引用や参照の箇所は、段落はローマ数字で、語句はローマ数字と傍線部に付した丸で囲んだアラビア数字を組み合わせて、指示する。
- (5) 内山氏前掲論文 p 五二九参照。
- (6) 内山氏前掲論文 p 五三〇参照。
- (7) 内山知也『沈既濟と『任氏伝・枕中記』について』(内山氏前掲書所収) p 三四一～三四四参照。
- (8) 『史記』秦本紀。
- (9) 『左伝』文公六年及び『史記』秦本紀穆公三十九年。
- (10) いずれも『史記』商君列伝
- (11) 斉の桓公の死は穆公十八年のことであるから、こちらも同時代人ではあるが、桓公の即位は穆公より二十六年早く、即

位後七年で霸者となっている。

- (12) 『論語』郷党に云う、「緇衣羔裘、素衣麤裘、黃衣狐裘。」また『礼記』玉藻に云う、「狐裘黃衣以裼之、錦衣狐裘、諸侯之服也。」

- (13) 唐代の黃衣については、『新唐書』車服志に云う、「黃爲流外官及庶人之服。」宦官について、『旧唐書』宦官列伝に云う、「但在閤門守禦、黃衣廩食而已。」また『新唐書』宦官列伝に云う、「至中宗、黃衣乃二千員。」

- (14) 石田幹之助『唐代風俗史抄』四・字舞（『長安の春』昭和四十二年平凡社刊所収）参照。

- (15) 『枕中記』に云う、「夫寵辱之道、窮達之運、得喪之理、死生之情、尽知之矣。此先生所以窒吾欲也。敢不受教。」

- 「南柯太守伝」に云う、「後之君子、幸以南柯爲偶然、無以名位驕於天壤間云。」

- (16) 『枕中記』に云う、「時主人方蒸黍……主人蒸黍未熟、触類如故。」

- 「南柯太守伝」に云う、「二友謂生曰、『子其寢矣。余將秣馬濯足、俟子少愈而去。』……二客濯足於楊。」

- (17) 『枕中記』に云う、「其枕青瓷、而竅其兩端。生俛首就之、見其竅漸大、明朗。乃拳身而入、遂至其家。」

- (18) 注（7）に同じ。

- (19) 史実との最大の差異は以下のことである。開元七年（七一九）に布衣であつた主人公は五十余年の官界生活を送つた

- が、その後半は「昇平二紀」であつた。ということは安史の乱（七五五）は起こらなかつたことになる。

- (20) 注（7）に同じ。

- (21) これは秦公を玄宗に見立ててゐることを意味するのではない。「秦夢記」において実現されているのは弄玉＝楊貴妃という見立てだけである。玄宗の役割は沈亜之と秦公に分担されているが、それも弄玉＝楊貴妃という見立てに貢獻する限りにおいてである。もし秦公を玄宗に見立てるのであれば、安史の乱に対応するエピソードが不可欠であらう。

- (22) 「周秦行紀」に云う、「天寶中、宮人呼玄宗多曰三郎。」